

(1ページ)

中断された生活

紀元(Common Era)79年の8月25日の早朝、ポンペイに降り注ぐ軽石の雨はやわらいでいるところであった。それは、安全を求めようと努めてその町を去るには良いタイミングのようであった。さまよい歩く20人以上の逃亡者からなるある集団は、それまでおそろしい土砂降りがもっとも強かった間は壁の中で隠れていたのだが、町の東の門のひとつ(へ行く)という危険を冒していった、火山の爆撃の範囲から外へ出る道を見つけられることを祈りながら。

何人かの別の人たちは、この道を何時間か前に試していた。ある一組の男女が逃げたのだ、小さな鍵(その男女はたぶんいつの日かその鍵で閉じたものが家、アパート、持ち運び用の箱、金庫、の何であれその閉じたものへと戻ることを願ったのだろう)と小さな銅製のランプ(図1)だけを持って。これ(ランプ)は夜と、瓦礫による煙の暗さに対して、ほとんど十分な威力を発揮できなかった。しかしランプは高価で流行の物品で、黒人アフリカ人の頭の形にかたどられていた——これは(現代人であるところの)私たちにとって、)ポンペイでよくお目にかかる、ポンペイの天真爛漫さ(ingenuity)の困惑するような形でのあらわれだ。そのカップルはうまくいかなかった(注:うまくいかなかったのは「逃亡」ですよ、念のため。)。軽石に覆われた状態で、彼らは1907年に彼らが倒れた場所で他の死体と同様、発見された、その場所とはこの道に並んでいた大きな墓石の一つの横で、他の死体と同様、街の外側であった。実際、彼らはおそらく(噴火の)50年前に死んでいた、ヌメリウス・ヘレンニウス・セルルス Numerius Herennius Celsus の妻であるところの、アエスキリア・ポラ Aesquilla Polla の豪華な記念碑の横で倒れたのだ。丁度22歳で(今でも墓石から読めるのです)、彼女は確実に彼女の金持ちな夫の年齢の半分以下だと考えられていて、(夫セルルスは)ポンペイで最も有名な一族のうちの一つの構成員で、ローマ軍の将校として仕えていて、ポンペイの地方政府の最高級の職に二回選ばれたことがあった。

軽石の層はその他の人々(これって冒頭の20人以上のグループのことでしたっけ??←忘れた)が同じ方向へと思い切って逃げようと思いつくときまでに数フィートにまで増えていた。

(2ページ)

徒歩は遅いし、困難であった。このような逃亡者たちの多くは若い男で、何も持っていくものがなかったかあるいはもう自分の貴重品のところへとたどり着くことが出来なかったためか、多くは何も持っていなかった。ある男は自分自身を洗練された鞆(ちなみに彼はもう一つ鞆を持っていたが、それは空で、それは多分鞆に入っていた武器を貸すか失くすかしたからだろう)に収めた短剣で武装するという予防策を講じていた(日本語的に言うなら「短剣をもっていった」になるのでしょうか)。その集団にいたわずかな女性はもっとたくさん持っていた。ある者は女神フォルトゥナの小さな銀製の像に加えて少量の金銀の指輪をもっていた。(フォルトゥナは)「幸運」(の意味で)、王座の上に座っていた。(指輪の)一つは鎖につながった小さな銀製の男性器がついていて、もしかしたら幸運のお守り(だったの)かもしれない(そして(この男性器をかたどった像は)(黒人の頭の形のランプとは別の)もうひとつの、この本の間でよくお目にかかる物品である)。他の女性たちは高価な装身具を少し持っていた。例えば、銀の薬箱や、(見つかっていないが)像やいくつかの鍵を置く小さな土台、これらが皆一つの布袋に詰め込まれていた。他にはネックレスやイヤリングや銀のスプーンやよりたくさんの鍵の入った木の宝石箱もあった。彼女たちは持てる限りの現金も持っていた。ある人たちにとってはそれはほんの少しのばらの小銭であり、他の人たちにとっては家に隠したあらゆるお金であるか、店の収益であった。しかし(いずれにせよ)そんなにたくさんではなかった。全部ひっくるめて、集団全体でたった500セステルスであり、それはポンペイにおいてはだいたいラバー頭を買うのにかかるぐらいの金額であった。

このグループの何人かはより早く逃げた男女よりは少しだけ遠くまで逃げることができた。15人かそこらは次の大きな記念碑までたどりつき、その時現在では「火砕流」として知られているものが彼らを一掃した。(挿入句その1)(その記念碑は)その道を20メートル(だけさっきのカップルよりも)より進んだところで、マルクス・オベリウス・フィルムス Marcus Obellius Firmus の墓であった。(挿入句その2)火砕流とはすさまじい速さで進んでいく、致死性の、ガスや火山の瓦礫や溶岩の燃え滾る混合物で、どんなものであっても生き残ることはできないのだ(関係代名詞を使わない文にすれば「nothing could survive against pyroclastic surge」)。彼らの遺体は、何体かは木の枝に巻き込まれ、あるいはおそらく木の枝を握り締めさえした状態で発見された。

(3ページ)

もしかしたら彼らの中でより機敏な(agile)ものは、自分の身を守ろうという無意味にも試みて、墓石を囲んでいた木につかまっていたのかもしれない。よりありえるのは、逃亡者たちを葬り去った火砕流が、木を彼らの上へと押し運びもしたということだ。

オベリウス・フィルムスの墓自身はもっとうまくいった(訳注:うまくいったのは墓というよりオベリウスさんの方なんじゃないかと思うのですがここはよく意味が分かりません)。彼は(1ページに出てくる Celsus さんとは別の)また別のポンペイの高官で、数十年前に死んでいた、そして数十年前というのは彼の記念碑の側面が地域の伝言板として使われるようになるには十分昔であった。今でもそこに剣闘士のショーの宣伝や、墓のそばでだらだらしている人たちのたくさんの落書きを読むことが出来る:例えば、「やああイサ、ハビトゥスより」、「やあオカスス、セプシニアヌスより」、などなど(ハビトゥスの友人たちはどうやら大きな陰茎と睾丸の絵と、「やあハビトゥス、君のそこら中の友人より」と応えたようだ)その上に、オベリウス・フィルムスの正式な墓碑銘では、彼の葬式が地方議会によって支払われ、それは5000セステルスにもおよび、さらに焼香のため他の地方公務員によって加えられた1000セステルスと「盾」(おそらく盾に描かれた肖像画で、それはローマ時代の特徴的な追悼の方式なのだ)。これらの葬式の支出は、言い換えると、逃亡者の集団がなんとかして安全への逃亡のために集めた金額の優に10倍を超えていたのだ。

(4ページ)

ポンペイは、貧富(の共存する)街だったのだ。

私たちは避難の試みの、たくさんの別の話を辿ることができる。400体近くが軽石の層の中で見つかり、700ほどが今では固い、火砕流の残骸の中で見つかった。彼らの多くは、腐りつつある肉や衣服で残った空間を漆喰で埋め、たくりあがったチュニックやくるまれた顔、恐ろしい表情を明かす巧みな技術により、彼らの死の瞬間の状態でありありと取り戻されている(図2)。ある4人からなる集団は、フォルム近くの通りで見つかったのだが、おそらく逃げようとしていた一家全員だ。父親が前を行っていた。彼はたくましい男で、大きなふさふさとした眉毛をしていた(石膏模型の示すところでは)。彼は降り注ぐ灰や岩屑から自分自身を守るため自分のマントを頭の上にかけて、そして金のアクセサリー(一個の装飾のない指輪と数個のイヤリング)やいくつかの鍵と、そしてこの場合、まあまあ額の現金、ほぼ400セステルスを持っていた。二人の小さな娘があとに続き、母親は最後尾にいた。彼女は服の裾を折って歩きやすくし、そしてより家的な貴重品を小さなカバンに入れて持っていた。

(5ページ)

(具体的には)家の銀具(スプーン数本、ゴブレット(大きめのグラス)一組、フォルトウナの像付きメダル、一枚の鏡)と少年の小さな坐像、これは外套を着ていて、素足が下から覗いている(図3)。それは粗雑な作品ではあるが、琥珀でできており、琥珀はバルト諸国のポンペイから最も近い供給地から、何100キロも運ばれてきた可能性が非常に高い。すなわち、お宝だということだ。

他の発見物は他の命について教えてくれる。自分の治療道具の箱をつかんで逃げ、南門の一つを目指し、アンフィテアトルの近くのパラエストラ(大きく開けた空間あるいは運動場)を横切るときに致命的な火砕流に飲み込まれた医療関係者がいた。奴隷が街の中心の大きな家の庭で見つかった。彼の動きは確実に足首の鉄製のタガによって妨げられていた。女神イシスの祭司(もしかしたら神殿の奉仕者かもしれない)は神殿の貴重品を逃げる際に持っていこうと小包にしたものの、彼もまた死ぬまでに50メートルも進むことができなかった。そしてもちろん(もちろんというのは、これから出てくるのが有名な話だから?)、豪華に装身した婦人がいて、彼女は剣闘士の兵舎の部屋の一つで発見された。これはしばしば上流階級のローマ時代の女性の、剣闘士のたくたくましい体趣味の良い表れとして書かれてきた。これは良くないときに良くない場所で死んでしまった人のひとりのように思える。彼女の不貞が歴史の眼にさらされてしまったのだ。しかし実際はもっとずっと罪の無い光景なのだ。ほぼ確実にその女性はデートをしていたわけでは全くなく、町の外へと彼女が逃げる途中で進むことがあまりにも困難になったので、兵舎に逃げていたのだ。少なくとも、これがもしも若い男との密会であったとしても、その他17人と犬数匹の犬もいるなかでの密会だったことになる。彼らの遺体は皆同じ小さな部屋で見つかった。

ポンペイの死体は、崩壊した都市ポンペイの最も強烈なイメージで、また魅力でもあってきた。18・19世紀に行われた初期の発掘では、骸骨が王族その他高位の人の訪問中に都合よく「発見」された(図4)。ロマン主義の旅人たちは哀れな魂の遺骸を目撃し、その魂を苦しめた恐ろしい災害を思っただげさに表現した。ポンペイでの体験全体によって刺激される、人間の存在の危険なもろさへの、より一般的な回想は言うまでもない。苗字はイタリア人音楽教師との結婚によるものであるイギリスの作家ヘスター・リンチ・ピオッツィは

(5~6ページ)

1786年にポンペイを訪れた後にこれらの反応を文字で表し(そして少しもじつて)いる。「こんな光景から浮かぶ考えはなんと恐ろしいのだろう!このような光景は明日にも再び繰り返られるかもしれないということはなんと恐ろしいのだろう。そして、今は観客である人々が、何百年後の旅人の見世物になり、ひょっとしたら私たちの骨をナポリ人のものと取り違えて彼らの国へと持って帰ってしまうかもしれないのだ。」

(6ページ)

実際、最初期の発掘において最も賛美された物品は、1770年代に都市の城壁のすぐ外のある大きな家(いわゆるディオメデスの邸宅)で見つかった、女性の胸の陰影である。体の穴(口とかその他もろもろ)の完全な石膏模型を作る技術が完成するほぼ100年前、固い岩屑によって発掘者は死者の完全な状態(form)を見ることができる。彼らの服から、髪の毛であっても、溶岩にかたどられた状態で。彼らがなんとか取り出し、保存することに成功した唯一の部分は、胸の一方で、それは近くの博物館に展示され、すぐに旅行客の注目の的になった。やがてそれはまたテオフィル・ゴーチエの1852年の有名な中編小説である、『ポンペイ夜話(Arria Marcella)』の動機づけにもなった。この本は自分が博物館で見た胸に魅了され、彼の愛しい夢の女性、すなわちディオメデスの別荘の最後の住人のひとりを、発見する、というよりは作りなおすために、古代都市に戻るのだ(タイム・トラベルと希望的観測とファンタジーの不思議な組み合わせで)。悲しいことにその胸自身は、素晴らしい賛美とは裏腹に、単に消えてしまい、1950年代の大規模な搜索でもその運命の暗示すら明かすことはできなかった。ある説では、好奇心あふれる19世紀の科学者による一連の分解試験が最終的にはばらばらにしてしまったということだ。いわば灰から灰へと。

(7ページ)

ポンペイの死者の威力は私たちの時代にまでもつづいている。プリモ・レヴィの詩『ポンペイの女子供』で母親をつかんだ状態(「まるで空が黒く変わったとき、母親の中へと戻っていきかかったかのように」)で発見された、小さな女の子の石膏模型が、アンネ・フランクや無名のヒロシマの女学生、つまり自然災害というよりは人工の災害の犠牲者達(「天が我々に下した苦痛はもう十分だ / その指がボタンを押す前に(核のボタンをおすこと、だそうです)、立ち止まり、考えてみよ」)、を回想するために題材とされている。二体の石膏模型はロベルト・ロッセリーニの1953年の映画『イタリア旅行』ではカメオ(古代からある瑪瑙や貝殻を利用した装飾品)のような役割を果たしている。ちなみにこの映画は「近代映画最初の作品」と賞賛されたが、しかし商業的には大失敗であった。お互いに抱き合った状態で、恋人たちは動くこともないのだが、ヴェスヴィオ火山のこのような犠牲者達は鋭く、心を動揺させるように二人の近代の旅行家(当時ロッセリーニとのためらわざるを得ないような結婚にあったイングリッド・バーグマン(イングリッド・バーグマンはロッセリーニとの不倫によって厳しいバッシングを受けた女優)と、そしてジョージ・サンダース(何度も離婚と結婚を繰り返した俳優))にただいかに彼ら自身の関係がいかに遠く、空虚なものになってしまったかを思い出させるものとしての役割を果たしている。しかしこのように保存されているのは人間の犠牲者ばかりではない。最も有名で、そして人を喚起させる石膏の一つは、金持ちの縮絨屋(洗濯屋兼布工場屋)の家の柱につながれたまま見つかった番犬である。その犬は鎖から逃れようと半狂乱になって死んだ。

覗き趣味や情念、そして墓暴きの(ghoulはイスラム教伝説で墓を暴く亡霊)好色は確かにすべてこれらの石膏像の魅力に貢献している。誰よりも頑固な考古学者でさえも犠牲者の死の苦痛、すなわち火砕流によって人間の身に引き起こる被害(「彼らの脳は沸騰したであろう...」)のぞっとするような描写を思い付くことができちゃうのだ。石膏模型のいくらかが今でも発見場所の近くに展示してある、ポンペイの現場への訪問者にとって、犠牲者達は「エジプトのミイラ効果」のようなものを引き起こす。小さな子どもたちは恐怖を叫びながらガラスケースに鼻をくっつけ、一方で大人たちはカメラという手段に訴える。しかし大人たちの、そのような死体に対するおなじように残酷なワクワク感をほとんど隠

(7~8ページ)

していない。

しかし墓暴き趣味が話のすべてなわけではない。というのは、犠牲者達のもつ衝撃は(完全に石膏化できてもできなくても)彼らの提供してくれる古代世界や、彼らのおかげで再構成することの出来る人間の物語、そして数千年の時を越えて感情移入できるような現実の人々の選択、決心、希望というものに、即座に接触できるような感覚からもきているのである。自分で持っていきけるだけのものを持って家を放棄するというのがどういう事なのか想像するために、考古学者になる必要はない。私たちは自分の職業道具を持っていくことを決めた医者に同情し、そして家においてきてしまったであろう物への後悔をほぼ共有することができる。道へ繰り出す前に正面玄関の鍵をポケットにするりと忍ばせた人たちの虚しい楽観を理解することができる。あの不愉快な小さな琥珀の小立像ですら、誰かの大切な宝物で、最期に家を去るときに何とか持っていったと分かったら、特別な意味を呈してくる。

(8ページ)

近代科学によって個人の人生の話に付け加えができる。今では以前の世代よりも上に行くことができるのだ、あらゆる種類の個人情報や現存する骸骨から搾り取るという点において。(最近になって分かるようになったことの例)人々の身長・体格(古代のポンペイ人は、もし何かあるとしても少しだけ現在のナポリ人(ナポリとポンペイは比較的近い)よりも背が高かった)といった比較的単純な物差しから、子供時代の病気や骨折の雄弁な証拠、そしてDNAその他生物学的解析によって分かるようになりつつある家族関係や民族的起源のヒントにいたるまで。ただし一部の考古学者がやったように、ある十代の男の子の骨格のある特定の発達様式は、彼はその短い人生の多くを漁師として過ごしてきて、口の右手側の歯の侵食は獲物のかかった釣り糸を噛むことによって起こったのだ、**ということ**を**十分示している**とまで主張するのは、証拠を広く適用しすぎであろう。しかし他の点では私たちはもっと強固な根拠の上にいる。

例えばある大きな家の奥の二つの部屋の中に、12人の遺体が発見された。多分家の所有者とその家族、そして奴隷たちだ。子供6人大人6人、そ

(8つづき)

のなかには10代後半の女の子がいて、彼女は死亡当時妊娠9ヶ月であり、お腹の中には胎児の骨がじっと横たわっている。多分彼女が妊娠後期であったことこそが、その場の全員に急いで逃げる危険を冒すよりも屋内に隠れ、最善を願おうとさせたのだろう。骸骨は1975年に見つかって以来、あまりにも不注意に保存されてきた(ある科学者が最近報告したように、「ひとりの頭蓋骨の下小臼歯が上の中央の門歯の穴に間違っくっつけられていた」という事は古代の歯医者の不器用だったことの証拠ではなく、近代の修理の不器用だったことの証拠なのだ)。しかしながら(おかしなこともやっていたりするけれど)、犠牲者の相対的な年齢や、妊婦の持っていた高級宝石、彼女と9歳の男の子が同じ大したことのない遺伝性の背骨の病気に掛かっていたことといった現存する様々なヒントを寄せ集めることでその家に住んでいた家族の絵を描き始めることができる。ある老夫婦、男は60代、女は50くらいで関節炎の明確な印があるのだが、その老夫婦はかなり高い確率で家の所有者であり、そして妊婦の両親もしくは祖父母でもあった。身に付けていた宝石の量から、妊婦は奴隷ではないとかなりの確信を持てるし、そして共通の背骨の問題がほのめかすのは彼女はその家族と結婚よりは血縁による親戚関係にあったということだ。そして9歳の男の子は彼女の弟なのだろう。だとすると、彼女とその夫(おそらく20代の男で、彼の頭は、それは骸骨が示していることなのだが、はっきり、醜く、そして間違いなく痛々しく右に傾いていた)は家族と同居していたか、あるいは出産のため実家に帰っていたか、あるいはもちろんただたまたま運命の日にそこを訪れていたのだろう。その他の大人は、60代の男と30代の女だが、奴隷か親族か、どちらも同じくらいあり得る。

(9ページ)

彼らの歯をよく見てみると、歯が再接着されたにせよどうにせよ、さらなる詳細が加わる。歯の殆どにはエナメル質に一連の隠しきれない雄弁な輪っかがあり、その輪っかは子供時代から繰り返し起こる感染性の病気の発作によるものだ。これはローマ時代の世界の幼児の危険な状態をよく思い出させてくれるものである。ローマ時代では、生まれた子の半分以上が10歳になる前に死んでしまっていたのだ。(ただましなのは10歳までうまくやっていたら、平均して40年かそれ以上生きることを期待できた。)はっきりとした虫歯の存在は、現代の西洋の水準よりは低いとしても、多くの砂糖とデンプンを含んだ食生活を示している。大人の中で、妊婦の夫だけは虫歯の証拠がなかった。しかし再び彼の歯の状態から判断するに彼はおそらくポンペイの外、しかも普通よりも高い水準の天然フッ化物のある地域で育っている。なにより驚きなのは、どの骸骨にも、子供であっても、時には数ミリにも及ぶほどの歯石の大きな蓄積が見られた。爪楊枝はおそらく存在したし、もっと洗練された歯のつや出し・漂白用の調合薬物もおそらくあった(薬の調合法の本に、皇帝クラウディウスの専属医師が皇后メッサリーナにいい笑顔を差し上げたといわれる混合物を記録している。(そのレシピは)焼いた鹿の角、松脂と岩塩。)しかしここは歯ブラシのない世界である。ポンペイは息がとっても臭い町であったに違いない。

中断された都市

今にも出産しそうな女性、柱につながれたままの犬、そしてはっきりとした人の息の匂い……これらは途中で突然止まってしまったローマ時代の街の日常生活の覚えやすい情景だ。そんな光景はもっとたくさんある。オーブンの中で、焼き途中で止まったまま見つかったパン一斤。部屋の再修飾の真っ最中に逃げ出し、ペンキのツボとバケツ一杯の生の石膏を足場高く置いて行ってしまった塗装屋の一团。噴火で足場が崩壊したとき、バケツの中身は綺麗に準備された壁にびしゃっとかかり、今日でも見える厚いペンキの皮を残している(120-124ページを見よ)。しかしその表面を削ってみよう、するとポンペイの物語はもっと複雑で、そして興味を沸き立てるものだと分かる。多くの意味でポンペイはマリー・セレステ号という、不思議なことに捨てられた19世紀の

(9つづき～10ページ)

船で、ちなみにゆで卵がずっと(といわれている)朝食の食卓の上にあるようなものの、古代における等価のものではない。ポンペイは流れの途中で単に凍ってしまったローマ時代の街ではないのだ。

まず、ポンペイの人々は少なくとも数時間前、ひょっとしたら数日前には警告の印を見ていたのだ。現在ある噴火の唯一の目撃証言(による記録)は噴火の四半世紀後に歴史家タキトゥスに当ててその友人である小プリニウスによって書かれた数通の手紙である。ちなみに小プリニウスはその災害が襲ったときはナポリ湾に滞在していた。

(10ページ)

おそらく後知恵や想像によって書かれているのだが、これらの手紙は『カサマツのような』雲がヴェスヴィオ火山の噴火口から現れた後でさえまだ逃げることは可能であったことをはっきりさせてくれる。小プリニウスのおじは、最も有名な噴火の犠牲者なのだが、彼はただ喘息持ちで、勇敢にも、あるいは愚かにも学術の発展の名のもと、何が起きているかをより近くで見る必要があると決心したために死んでしまった。そしてもしも多くの考古学者が現在考えているように一連の震動や小さな地震が噴火へつながる数日か数ヶ月前にあったとすれば、それらの震動もまた人々にポンペイの地を去ることをうながしたであろう。というのは、脅威を受け、最終的に飲み込まれたのはポンペイそれ自身だけではなく、ヴェスヴィオ火山の南への細長い土地であって、それにはヘルクラネウム(現エルコラー)やスタビアエの街も含む。

ポンペイで見つかった死体の記録が示すように、たくさんの人が実際逃げていたのだ。発掘によっておよそ 1100 人が掘り出された。未だにポンペイのみ発掘の部分に横たわっている人(古代ポンペイのおよそ四分の一は今のところ探索されていない)や、初期の発掘で失われてしまった遺体(子供の骨は簡単に動物のものと間違えられ、捨てられてしまい得る)は考慮する必要がある。それでも住民 2000 人より多くがその災害で生命を失った可能性は低く思われる。全体の人口がいくらにせよ、——そして推測値はおよそ 6400 人から 30000 人までにも変わる(これらの人々がどれくらい密集して暮らしてい

(10つづき)

たかと考えるかや、近代のどの対象を比較対象として選ぶかに依存する)——これは小さい、というか非常に小さい割合だ。

軽石の雨の中を逃げる人々は、自分たちがつかんで持っていけるだけのものだけを持って行ったのかもしれない。もっと時間のある人々は所有物のより多くを持って行っただろう。人口の大半が論理的に可能な限り多くの個人資産を積み、街を去っていく時、ポンペイからのロバや荷馬車や手押し車を引き連れた大脱出(exodus は、もともと旧約聖書におけるイスラエル人のエジプト脱出を指す言葉)を想像しなければならぬ。ある人たちは間違った決定をしてしまった。一番大切な所有物に鍵をかけ、危機が去ったら戻ろうと意図したのだ。このことが、壮大な宝物のいくつかを説明しているのだ——例えばポンペイの中や近くの家で見つかった美しい銀の収集品のような(220 ページを見よ)。しかしほとんどにおいて、考古学者が発見するべくして残されていたものは、住人が急いで荷造りして去った後の都市である。このことはなぜポンペイの家にはそんなにもまばらにしか家具がなく、そんなにも散らかっていないのかを説明する手がかりとなるかもしれない。紀元一世紀の支配的な美学がある種の近代人と言うミニマリズム(美術・建築などの造形芸術分野において、1960年代のアメリカに登場し主流を占めた傾向、またその創作理論であり、最小限(Minimal)主義(ism)から誕生し、必要最小限を目指す手法)だったということではおそくない。多くに家財道具は非常に高い確率で、それを愛する所有者達によって、積荷単位で(by the wagonload)荷馬車で持っていかれた(carted off)のだ。

この迅速な引き払いは、私たちが実際にポンペイの家の中で見つけるものの奇妙さのいくらかをも説明できるかもしれない。

(11ページ)

例えば、もしも園芸用具の山が高級な食事部屋らしいところで明るみに出たすると、それはもしかしたら — 私たちにとっては驚くべきことかもしれないが — その用具が普段置いてある場所であったのかもしれない。持ち物が一緒に集められ、何を持って行って何を持っていかないか決定したりするような出発の混乱の中でそれがスコップやくわや手押し車がたまたま行き着いた場所だった、ということかもしれない。もしも人々がまるで明日が確かに来るかのように普段どおりの生活を送っていたとしても、その日は日常の業務を行う、普通の都市ではない。逃走状態にある都市なのだ。

噴火の数週間そして数ヶ月後多くの生存者もまた自分たちのおいてきたものを求めて、あるいは青銅や鉛や大理石といった再利用可能な資材を埋まった都市から回収する(あるいは略奪する)ために戻ってきた。今考えてみれば貴重品を、後で取りに帰ろうという希望のもとに鍵をかけておいてきてしまったのそれほど愚かではなかったかもしれない。というのは、ポンペイの多くの部分では、火山岩層を通り抜けての成功的な再突入の明確な兆しがあったのだ。正当な権利を持つ所有者であれ、略奪者であれ、一か八かをかけたトレジャーハンターであれ、彼らは高級な家屋へと掘り進んでいった。そしてある塞がれた部屋から別の部屋へと行く際に時々壁に小さな跡を残していった。彼らの活動をうまくチラ見することは、ある大きな家の正面ドアにほられた二つの言葉からでき(意訳)、ちなみにその家は19世紀の発掘家によって開けられた際にはほとんど空である状態で発見された。曰く、「トンネル済(House tunnelled)」で、この言葉は言えの所有者に書かれた可能性は殆どなく、したがっておそらく、この家はもう「やってしまった」と伝えるためのある略奪者から残りの一味への伝言であろう。

このようなトンネル掘りが誰であったかについてはほとんど何もわかっていない(けれどもこの伝言がラテン語で書かれているのにギリシア文字であったという事実は彼らがバイリンガルで、第一章で探索していく南イタリアのグレコローマン共同体に属していることに明確な証拠だ)。彼らが略奪を仕掛けたのが正確に何時であるかも同様に分からない。噴火後のローマ帝国硬貨がポンペイ遺跡で見つかっていて、それらは紀元一世紀の終りから四世紀のはじ

めまでに時期が及んでいる。しかし後のローマ時代の人々が埋まった街を発掘しようと決めたのが何時であれ、そしてそれがどんな理由であれ、発掘は驚くほど危険な活動で、大量の家族の財産を取り戻すか、あるいは盗品の一儲けを持って出てくるという希望が原動力となっている。トンネルは危険で、暗く、そして狭かったに違いないし、そしていくつかの場所ではもし壁にあいたその穴の大きさが判断の頼りになるようなものであれば子供にしか通ることができなかった。もっと自由に歩くことが可能な場所であっても — つまり火山岩層に満たされていない空洞でも — 壁や天井は今にも起こりそうな崩壊の危険にさらされていたであろう。

皮肉なことに、発見された骨格の中にはほとんど確実に噴火の犠牲者のものではなく、噴火の後の何ヶ月、何年、何世紀もあとに(ポンペイの)街に戻るといふ危険を犯した人のものもある。

(12ページ)

だから、例えば、メナンドロスの家 — (これは) 現代 (に名づけられた) 名で、その家から見つかったギリシャの劇作家メナンドロスの絵からつけられたものである — の中庭から離れた洗練された部屋の中に、三人組の遺体が発見されている。(ちなみにその三人組は) 大人二人と子供一人で、ツルハシとクワをもっていた。考古学者の一部が思っている (信じている) ように、これらの遺体は住人たちかもしくは奴隷で、(as...を先に訳します) 家が (瓦礫などに) 飲み込まれ始める時、(家を) 叩き壊して (batter) 家の外に **でよう**としていて、最終的に試み半ばで命を失ってしまったのだろうか？ もしくは、他の考古学者が想像するように、彼らは略奪者の一行で、叩き壊して家に入ろうとしていて、もしかしたら自分たちの壊れやすいトンネルが彼らの上に崩落してきたのだろうか？

この混乱 (分裂、粉碎？ disrupted) した街の状況 (picture: イメージ、状況の比喩) は、より前の自然災害によって余計に複雑になっている。ヴェスヴィオ火山の噴火の17年前、起源62年、ポンペイの街は地震によってひどく損傷を受けていた。歴史家タキトゥス (前出: p. 9 の最終行 小プリニウスが手紙を送った相手) によれば、「ポンペイの大部分が崩壊した」のだ。そしてその出来事はほぼ明確に (注: この訳は変かもw) ポンペイの銀行幹部職員ルーキウス・カエキリウス・ユークンドウス Lucius Caecilius Jucundus の家で見つかった一組の彫刻のなされた板に描かれている。これら (の彫刻) は、地震によって揺さぶられた、街の二つの地域を示している。(ひとつめは) フォルム (公共広場: 商業活動、政治・司法の集会、宗教儀式、その他の社会活動が行われるオープン・スペースであり、また市民生活の上で最も重要な都市施設 by wikipedia) で、(もう片方は) ヴェスヴィオ火山に向かって面している街の北門の周辺の地域である。一方 (フォルムのこと) には (注: 以下は固有名詞であることに注意しよう) ユピテル (ギリシア神話で言うゼウス ローマ神話の最高神) とユノー (ユピテルの妻 最高位の女神) とミネルウア (知恵と工芸を司る女神) の (をまつた一つの) 神殿が人を不安にさせるような感じで (alarming) 左に傾いている。神殿の両脇にある騎士の像はほとんど生き出しそうに見える。騎手が自分の馬から浮いているのだ。もう一方 (北門の周辺) にはヴェスヴィオ門が右へ不吉に傾いていて、左手にある大きな貯水池と分離している。この災害はポンペイの歴史に関する、いくつかのもっとも扱いづらい (trickiest) 質問を投げかけている。その (災害の) ポンペイへの影響は何だったのだろうか？ ポンペイが (災害から) 復活するのにどれくらいかかったのだろ

う？ というかそもそも復活したのだろうか？あるいは紀元79年 (これは噴火が起きた年です) のポンペイ人はまだ (地震の) 残がい — フォルムや寺院や公衆浴場、いうまでもなくたくさんの個人の家はまだ直っていない (状態) — の中で生きていたのだろうか？

(昔から今に至るまで@現在完了) 仮説はたくさんあった。

(13ページ)

ひとつの考え(注:もう一つはとつても遠いところにあるよ)は、地震のあと、社会的な革命がポンペイに起こった、というものである。伝統的貴族の多くが街をすぐに、しかも永久に去ることを決めたのだ(カンマ以下は次)。ちなみに多分(注:no doubtには「疑いなく」と「たぶん」の意味があります。この場合はどっちでしょう)行き先は別の場所の一家の不動産だ。彼らが去ったことは、解放奴隷やほかの成金たちが成り上がっていく道をあけたばかりだけでなく、ポンペイのより上品な家屋のうちいくらかの「衰退」(注:ここで引用符がついている理由は次の段落の最後に分かります)をもスタートさせた。「衰退」の具体的内容は、)急に(elegant housesが、)布工場(fullery:p7 最初の段落の終わり fuller: laundry-man-cum-cloth-workerを思い出そう)やパン屋や旅館やその他の商業的、工業的な目的に変えられた。実際、あの庭弄り用具(の積み重なり:that pile of gardening tools p.11 1.3 参照)はそれ自身ただそのような(物の)使い方(use)の変化を表しているだけなのかもしれない。かつて上流階級向けだった住居が、(後ろから訳していきます)上品な家(it)を市場向け野菜園の仕事の拠点へと変えた新しい住人によって、劇的に(庶民的なものへと)引きずり落とされた。

もしかしたらそうかもしれないね。そして、79年にポンペイが(火山に)圧倒されたときの、街の全く「普通」ではない状態を現代の私たちが見ることの出来るもう一つの理由(一つ目は逃げるとき物の取捨選択の結果農機具が変なところに置かれた、という説)がここにあるのかもしれないね(注:この2文は「譲歩」で、前の段落の内容を指示しているように見えるが、すぐ次の文でそれが否定されるのです)。けれど(前述した)これらの変化全てが地震の直接の結果であったと確信を持つことはできない。いずれにせよ、工業的な転換のいくらかは、おそらく地震よりも前におこったであろう。(工業的転換の)多くではないにせよ、いくらかは(「少なくともいくらか、ひよっとしたら多くが」、の解釈も可能@if not←kobakaさんによるとこちが有力)ほぼ確実に富や習慣や名声の(人から人への)移動という、古代でも近代でもあらゆる町の歴史を特徴付ける規則的なパターンの一部であった。(注:次の文はかたまりごとに分けて訳します)「役人階級(officerは解釈が難しいそうです)」的な偏見の暗示については言うまでも無い／多くの近代考古学者たちの抱いている(抱いている偏見の...)／(彼らは)非常に自信満々に社会の流動性や新しいお金の出現を革命やら衰退やらと同一視する。

もうひとつの大きな主張は、79年にポンペイはいまだ長い修復の課程を終えてはいなかったというものだ。考古学的証拠から言うことの出来る範囲

では、タキトゥスの「ポンペイの大部分が(地震で)崩壊した(p.12 1.13)」という主張は誇張のようなものであった。しかし、多くの公共建築物の状態(例えば、79年には公衆浴場はたった一箇所しか完全に正常に稼動していなかった)や、これから見ていくように、非常に多くの個人住宅(private houses:この訳語は微妙かも)に、噴火の時点で装飾屋がついていたという事実は、地震の被害が甚大であったことだけでなく、まだ正常な状態にになっていなかったことも暗示しているように思える(注:主語がとんでもなく長いのでアンダーラインで二つの主語を明示しました)。ローマ帝国時代の都市(a Roman cityというのは、その時代の都市一般の話であることを示している)にとって、17年間をほとんどの公衆浴場が稼動していなく、主要な寺院のいくつかが使用できなく、個人住宅が雑然とした状態ですごすということは、(#1)深刻な貨幣不足か、(#2)驚くべきほど(alarming 人に危険感を抱かせるような感じ)の制度(統治機構など)上の機能不全のどちらか、あるいは両方を指し示している。一体全体(What on earth)市の評議会は約20年間も何をしていたというのだろうか？くつろいで(Sitting back)、ポンペイの街がぼろぼろになるのをながめていたのだろうか？(皮肉だねえ^^)

しかし、ここでも(注:here tooというのは今まで述べてきた説を受けてのhereで、要はここでは今までの説にまた疑問を投げかけている)また、(私たちが今しがた考えたポンペイの物語の)全てが最初の想像通りというわけではない。噴火が起きたときに行われていた修理が全て、地震による被害だと私たちは確信を持てるだろうか？どんな町でも、建設途中の建物はたくさんある(修理や建設産業は、古代であれ現代であれ、都市生活の中心だ)というわかりきった点は脇に置いて、ポンペイを研究する考古学者たちを激しく分断してきた疑問(一応英語の構文のまま、他動詞にしておきましょう)に「地震は1回だったのか、それとも複数回あったのか？」というものがある。62年にたった1度だけひどい地震が起き、そして町は数年経ってもなお多くの修理が終わっていないような大混乱に陥ってしまったという考えにまだ固執する人も

いる。
(このページは、One idea → 疑問(“Maybe so.”) → Another big claim → 疑問(“here too”)という構造を押さえておけば少しは読みやすくなるでしょう。)

(14～15ページ)

(この主張をする人たちよりも)より多くの人は現在、噴火に繋がる数日間、もしかしたら数ヶ月間、一連の弱い地震のことを(があったはずだと)強く主張している。これ(一連の弱い地震)は、火山の専門家が言うように、大噴火が起こる前にあるだろうと予想される(主語は私たち。直訳だと「私たちが予想する」)ものだ。そしてさらに、「その前何日も、弱い地震が続いていた」という小プリニウスの記述と(この予想される一連の弱い地震は)まさに同じことである。もし同時にいくつもの改装(修理の方が妥当かも)が進められていたとしたら、(そしてこの議論(小さい地震があって……という議論)は実際そういうふうに進んでいくわけですが)、(この修理(やっぱり修理にしました)は)時期の遅れた、時期を得ない対処だったというわけではなく、ちょうど起きた地震の被害を修理していたというほうが、最終的な17年間の混乱(前出)の説明として、ずっとありえたものだろう。

町の状態、特に公の建物についてより一般的に言おうとすると、ここでまた後の時代の人たちが略奪していたという問題が、(問題を)よりややこしくするような要因となってくる。79年にいくつかの公の建物が廃墟となっていたというのは、かなり疑いようのないことだ。海を見下ろす位置にある、普通は女神Venusに奉じられていたと考えられるある巨大な神殿は、工事現場(建設中か更地かも不明な状態か。意見が割れました)のまま(まるで復元品は元の建物(what it replaced)よりも大きな規模にするつもりだったように見えるが)。他の建造物は、正常に機能している状態にちゃんと戻っていた。

(15ページ)

たとえば、イシスの神殿は通常通りになっていた(business as usual: 通常営業)、ちなみにイシス神殿は(噴火よりも前に)再建築され、今日ではポンペイから出土した中で最も有名になっている絵画で豪華に再修飾していた。

しかし、噴火が起こったときのForumの状態の方が、もっと謎に包まれている。ある説では、Forumは半壊していて、ほとんど修理されなかったと唱えられている。もしそうなら、丁寧に言えば、Forumは少なくともポンペイの人たちが共同生活を優先しなかった証拠だろう。悪くいえば、都市の制度が完全に崩壊していたと言えるだろう、(しかし)そういう状態は(これから見ていくように)ポンペイから得られるそのほかの証拠とは、全く合致しない。(a state of affairs

(15つづき)

は complete breakdown の言い換えなのでは?)もっと最近では、噴火の後の復興を行った人たちや略奪者たちを、(お前たちのせいでフォルムが半壊したんだぞ、と)非難する者もいる(直訳: ~や~に、非難の指が向けられている)。彼らは、Forumの大部分は修理され、しっかり改良されていたと考えている(直訳: この観点の言わんとするところは、フォルムが……たということである)。しかし、取り付けてから長くない表面の大理石のことを全部知っていたため、地元の人達はポンペイが埋まってすぐに掘って取り出した。壁から引っぺがしたのだ。それらの壁は、まるで建設途中か、もしくはただ荒れ果てて放置されているだけかのように見えた。もちろん、盗掘者たちもまた、この広場を飾ったたくさんの高価なブロンズ像をもとめていた(after ...)のでしょう。

これらの討論や意見の食い違いは、考古学学会に燃料を投下している。それらは、学術的な討論・学生のレポートの題材だ。しかし(もし解決されるとして)、どんな方法で解決されるとしても、はっきりしていることが1つある。「私たちの」ポンペイは日常生活が営まれているローマの町ではなく、たくさんのガイドブックやパンフレットに書いてあるように、ただ「時間の止まった」街でしかない。後者の方が前者よりもずっと意欲をかきたてる、興味深い町だ。崩壊し、混乱する。避難する者もいれば、略奪する者もいる。これらにより、ポンペイはあらゆる種類のさまざまな物語のしるし(傷跡)を背負っている。そのしるしとは、おそらくこの本の物語の一部であり、「ポンペイ・パラドックス」と呼んでいいものの基盤であるだろう。「ポンペイ・パラドックス」とは、私たちはポンペイでの古代の生活について非常に多くのことを知ると同時に、古代の生活についてほとんど何も分からないということである。

その都市(ポンペイ)が古代ローマ世界のほとんどど(の都市)よりも私達に現実味のある人々と彼らの生活のより生き生きとした描写(glimpseの本来の意味は「ちらりと見ること」)を提供しているというのは真実である。私達は出会うのだ、(何に出会ったかという) (#1)不幸な片思い男 (『織屋のスッケスはイリスという名のバーテンダーに恋しているけど、彼女には全く気が無い』とあるものが掻き文字で走り書きをした) や(#2)恥知らずのおねしょ男 (「僕はベッドにおねしょをして、ベッドをだめにしちゃった、僕は嘘をついていません/でも家主さん、尿瓶は備え付けてないんです」と下宿屋の寝室の壁に自慢げに詩を書い

(15つづきのつづき～16)

である) に。私達は、ある洗練された家の正面玄関や中央大広間の生のしっくいに一組の硬貨を突っ込む事にとっても楽しみを覚えていたであろうに違いないよちよち歩きの幼児、ちなみに床の高さからちょっと上のところに70個以上の印が残している(そして不注意にもその装飾の日付を示すちょっとした証拠も残っているが)、から入口から浴室のある一続きの部屋の子供の背の高さ、—そこにはおそらく彼らの母親が蒸し風呂に入り終わるのを待っている間にいたずら書きをしたのであろう—にひとそろいの棒人間をひっかいて書いた退屈した子供までのポンペイの子供の痕跡をたどることができる。

(16ページ)

ジャンジャンなる鈴を伴う馬具は言うまでもなく、ぞっとするような医療器具(図7)、落し卵用鍋からムースの流し型、もしそれがそれであるのならば(図78)、に至るまでの好奇心をそそる料理器具や2000年後にもトイレの縁にその跡を見る事ができるいらいらさせるような回虫—それらの全てはポンペイの生活の光景や音、感覚を捉え直す手助けになる。

この様な詳細はすばらしく(ポンペイの姿を)呼び起こすが、しかし町に関するより大きな全体像やより基本的な問いは実にとっても曖昧(murky)なままである。居住者の全体数は私達が直面している問題の唯一ではない。町と海の関係もその一つ<居住者の全体数の問題以外の一つの別の問題>である。海が古代ローマ・ギリシャの時代には今日(2km 離れている)よりもポンペイのはるかに近くにあったというのは皆意見が一致する。しかし、現代の地質学者の技術をもってしても、正確にどれくらい近かったのかというのはまだわからない。特にまごつかせるのは都市の西門、これは現代の観光客の主要な玄関であるのだが(the main modern visitor entrance←謎)、そのすぐ隣に、かなり明白に船の係船の輪のように見えるものがついた壁の広がり、あたかも海がちょうど都市のその場所までひたひたと打ち寄せていたようにあることである(図8)。唯一の問題は、古代ローマの建造物はさらに遠くの西の方、それは(西の方というのは)海の方であるが、で見付かっていたけれども、彼らはどうみても水面下に建築することは不可能であった事だ。この事を説明する最善の方法は進行中の地震の活動に再び戻る。

(17ページ)

ポンペイ —ヘルクラネウム(Herculaneum)の近くの町、ヘルクラネウムでは(地震の)活動がかなりはっきりと後付けされているが—では海岸線と海拔が町の歴史の中で最近の数百年にわたって劇的に変化したに違いない。

さらにもっと驚くことには、基本的な日付 —大地震(地震は63年でなく62年に起こったのかもしれない)の日付だけではなく噴火の日それ自身—についても議論がある事である。私達が今読んでいるプリニウス(Pliny)の記述にある79年の8月24日と25日という慣習的な日付を私はこの本を通して使っていくであろう。しかし、その災害がその年の遅く、秋か冬の間に起こったと考えるもっともな理由がある。まず、プリニウス(Pliny)の手紙の別の写本を見れば、噴火の日付ついてありとあらゆる異なった日付を彼らが挙げている事が分かるでしょう(というのは、古代ローマの日付と数字は中世の写字生達によって常に写し間違えられがちだからである)。(噴火が秋でないにしては)疑わしい位の大量の秋の農産物がはっきりと(in evidence は成句だそうです)残っている事や犠牲者の多くが暑いイタリアの夏にはどうみても適している衣服だとは思えない様な頑丈な毛織りの服を着ているという事も事実もある —けれども火山の噴火の瓦礫を通り抜けて逃げる時に人々が着るのに選ぶものは季節の天候の良い尺度にはならないであろう。

(19ページ)

より(議論の)決着をつけうる(clinching)な証拠は、略奪者が落としえないという状況での、ポンペイで見付かった古代ローマの硬貨という形で現れている。専門家は最も早くこの硬貨が鑄造されえたのは79年の9月だろうと考えている。

実は私達がポンペイに関して理解している事というのは思っているよりもずっと多いと同時に少ないのである。

ポンペイの二生 (two lives)

ポンペイは二度死んだという昔からの考古学の冗談がある。一度目の死は噴火による突然の死、二度目は十八世紀半ばからポンペイの発掘が始まって以来、その町が苦しんできた、慢性的な死である。遺跡に行けば必ず、二度目の死がどういうことを意味するのかということが正確に分かるだろう。ポンペイ考古学局[ポンペイ遺跡保護局みたいな感じなんじゃないか? Pompeian archaeological service]の尽力[heroic efforts/勇ましい努力]にもかかわらず、町の崩壊は進行し、観光客が立ち入り禁止になっている区域の多くでは雑草が生い茂っており、かつては光り輝くような彩色が施され、今もそのままの場所で壁にある[フレスコ画なら壁に直接かかっていたんでしょか]絵画のいくつかは、色あせてほとんど何もない状況になっている。これは、徐々に進行する荒廃の過程であって、この荒廃は、地震と大規模な観光によってさらに悪化させられ、そして、初期の発掘における粗雑な方法(しかしながら、正直なところ、初期の発掘者が切り離して博物館に預けた良い壁画の多くは元の場所にそのままあるよりは良い待遇を受けているといえるが)や、町のいくつかの地域を破壊した1943年の連合軍の爆破作戦(ほとんどの旅行者は、例えば、もっとも名高い家々のいくつかだけでなく、大劇場やフォルムの大部分がほとんどすべて戦後に再建設されたということや、現地にある[目の前にある? /on site]レストランが特にひどい爆撃を受けた地域に建っていたということに全く気づかない(知る余地も無い、の方が近い?)のだが)や、泥棒や心なき遺跡の破壊者、(彼らにとって考古学的な遺跡(大きく監視しづらい)は魅力的なターゲットなのである。2003年には一組の新しく発見されたフレスコ画(塗りたてのしっくいに水彩で描く絵)が無理矢理外され三日後近くの建設業者の庭で発見された。)

しかし、ポンペイは二つの生をもまた[二つの死と]同様に持っているのである。一つは古代のそれであり、もう一つは今現在我々が訪れている近代に再建設された古代のポンペイである。この観光客向けの遺跡はまだ、我々がまるでつい昨日のこのようにその中を歩くことができる、「時間の止まった」古代の町という神話を守ろうとしている。実際、驚くべきことに、ローマ時代のポンペイは現在の地表から何フィートも下にあるのに、ポンペイ遺跡への入り口は私たちがそこに下っていているという感じをほとんど抱かないように設計されている/並んでいる(どっちなか良く分かりませんが、どちらにせよ laid out は「レイアウト」のことなのではないでしょうか)。(つまり、)古代の世界がほとんど継ぎ目なく、私たちの世界と合流しているのだ。しかしながら、少し厳しく見ると、ポンペイはその奇妙な無人の場所にあつて、荒廃と再建築、そして古代と現在の間には存在していると言うことが分かる。まず第一に、ポンペイの町のほとんどは修復されており、それは単に戦時中の爆破の被害のあとだけではない。発掘された時点の建物の写真(図10)を見て、そしてどれほどまでにひどい状態でほとんどの建物が発見されたかわかることは、かなりのショックである(asはこの場合は when と似た働き?)。

(20ページ)

中には確かに、そんな風(荒廃したまま)に残されているものもある。しかしながら、新しい屋根を支えるために、壁を修復したり修理したりと、もっとしゃれている(smartened up)ものもある。主な目的としては構造物や装飾を守るためだが、しかし、観光客はしばしば[その修復された建物を間違えて]ローマ時代からの奇跡的な残存物だと捉える。

さらにポンペイの町は新しい地理を与えられている。我々は現在、一連の近代の通り名を使ってポンペイを通行している。その中には、[例えば] **dell'Abbondanza** 通り(主要な東西の大通りで直接フォルムにつづき、通りの噴水の一つにある女神アバンドانس[abundance/豊富]の像にちなんで名付けられた。)や、**Stabiana** 通り(**Abbondanza** と交差し、スタビアナの町に向かって南下する。)や、**Vicolo Storto**(明らかな理由で、世に言う曲がりくねった路地)などがある。我々はこれらの通りがローマ時代になんと呼ばれていたのかほとんど皆目見当がつかない。一つの現存する碑文は我々が呼ぶところの **Stabiana** 通りは当時は **Pompeiana** 通りであったことを示しているように思われるが、一方で正確な位置が特定できない二つの別の通りについて言及しているようにも思われる。(Jovia 通り、これはジュピター通りのこと、**Dequviaris** 通り、ひよつとしたら町議会や元老院と関係があったのかもしれない)しかしながら、多くの通りは現代のように特定の名前を持たなかったということも十分考えられる(日本と異なり、イギリスを始め欧米の街では全ての通りに名前がついているのが一般的。By kobaka)。確かに、ポンペイには道路標識などなく、住所を特定するのに通りの名前や家の番地を使うというシステムもなかった。代わりに人々は土地の目印[local landmarks]を使った。例えば、ある主人は自分のワインの入った広口瓶を[以下のように]届けさせている。(我々はまだ瓶の上の部分?を読むことができる)'ポンペイの円形闘技場近く、宿屋の主人 Euxinus へ(これはおおざっぱに訳すと、**Mr.Hospitality** になる)'

我々は同様にして町の門にも現代的な名前を付けていて、その場所や門が面している方向にちなんで門を呼んでいる。**Nola**(ノーラ:ポンペイの北の都市)門、**Herculaneum**(ヘルクラネウム:エルコラーノ ヴェスヴィオ火山のすぐ西)門、**Vesuvius**(ヴェスヴィオ火山:ポンペイの北西)門 **Marine** 門(海に面している)などというように。この場合は

我々は(通り名に比べて)古代の名が何であったのかについてむしろよりはっきりとした考えがある。例えば、**Herculaneum** 門と我々が呼ぶ門はローマ時代の住人にとっては、**Porta Saliniensis** あるいは **Porta Salis** であり、すなわちそれは「塩の門」(近くの製塩所にちなむ)の意である。現在の **Marine** 門は、いくつかの妥当と思われる現代の推論が組み合わさったいくつかの古代の証拠が提案するところによれば[証拠と妥当と思われる推論を組み合わせると]**Forum** 門とか呼ばれていた。なぜならその門は海に面しているだけでなく、フォルムから最も近い門だったからである。

古代の番地がなかったので、その町についての近代の地名辞典は、個々の建物のことを言うのに19世紀後半の方式を用いている。死体をかたどる《casting》技術を完成させたのと同じの考古学者、ジュゼッペ・フィオレッリ《Giuseppe Fiorelli》(かつては革命的な政治家で、それまでで最も有力なポンペイ発掘の指導者でもあった)が、ポンペイを9の個別の地区、すなわちレジョーネ **regiones** (伊語です。Fiorelliが分割した地区をこのように呼んだものと思われま)に分割したのである;それから彼は、これらの地区内にある家の区画ごとに番号を振り、続けて通りに面したすべての戸口にその個々の番号を付けた。従って、言い換えると、今日では標準的となっている考古学的な略記法《shorthand》によれば、'VI.XVI'は6番地区の15番区画の1番目の戸口を意味するのであって、それは町の北西にあった。

(21ページ)

しかし、多くの人にとっては、VI.XV.Iはヴェッティの家《the House of the Vettii》としての方がよく知られている。というのは、その簡素な《bare 原義は「裸の」 ニュアンスとしては「そのまんまの」みたいな感じでしょうか(kobakaさん風)》近代の番号付け《numeration》に加えて、宿屋や酒場だけでなく、少なくとも比較的大きな家の多くは、(簡素な番号付けよりは)よりその建物を思い出させるような《evocative←evoke(引き起こす)の派生》名前が付けられていたからである。これらの名前には、それが最初に発掘された状況までさかのぼるものもある《Some ~. 6行下のOtherと呼応します》: たとえば、百年記念の家《the House of the Centenary》は、町の滅亡からちょうど1800年後の1879年に発見された; 1893年に発掘された銀婚式の家《the House of the Silver Wedding》は、それと同じ日に祝われた、イタリア王ウンベルト《Umberto》の結婚25周年記念日を記念して《in honour of》名付けられた——皮肉なことに、その家は今や国王の結婚よりもよく知られている。特に記憶すべき発見物を反映した名前もある《Other》: メナンドロスの家《the House of the Menander》がその一つである《...12 ...3「その家から見つかったギリシャの劇作家メナンドロスの絵から名付けられた」》; ファウヌスの家《the House of the Faun》がもう一つで、そこで見つかった有名な青銅製の踊っているサテュロス《satyr》、すなわち‘ファウヌス’《faunとは「ヤギの角と足を持った半人半獣の森や牧畜の神」のこと。satyrはギリシャ神話での呼び名です》にちなんで名付けられた(図12)、(その建物の初期の名前、ゲーテの家《the House of Goethe》は、有名なヨハン・ウォルフガング・フォン・ゲーテ《Johann Wolfgang von Goethe》の息子までさかのぼるのだが、彼は死ぬほんの少し前の1830年に発掘の一部を目撃したのである——しかし彼の悲しい物語は活発な彫刻《青銅製のファウヌス》ほど記憶すべきものとはならなかった)。しかしながら、ヴェッティの家のように、《as以下から訳します》古代の町に再び居住させる《repopulating》というあのずっと大きな計画や、世俗的な遺物《material remains》とかつてそれを所有、使用し、あるいはそこに居住していた人々とを結びつけるという計画の一環として《as a part of》、非常に多くは古代ローマの居住者にちなんで名付けられたのである。《「~もあるし、~もある。しかし非常に多くは~」という流れです》

これ《古代ローマ時代の居住者にちなんで建物に名前を付けること》はわくわくするような、ひよつとすると時には《間違った結びつけをしまうという》危険を伴う《dodgy》方法である。《遺物とその所有者とを》正しく結びつけたと確信することができる場合はある。たとえ

ば、銀行幹部職員ルキウス・カエキリウス・ユクンドゥスの家《the house of the banker Lucius Caecilius Jucundus》は、屋根裏にしまわれていた銀行の公文書によりほとんど確実に結びつけられる《identified》。アウルス・ウンブリキウス・スカウルス《Aulus Umbricius Scaurus》は、最も成功した地元の《garum》(古代ローマに特徴的な腐敗しかけた海の生物を混ぜ合わせたもの《concoction》で、遠まわしに《euphemistically》‘魚醤《fish sauce》’と言い換えられる)の製造業者であるが、彼はその印と名前を自分の格調高い不動産(財産?)に残した——「魚醤、最高級、スカウルス工場産」といった標語をラベル付けされている壺(注:アンフォラというそうです)を描いた一連のモザイク画を含めて(注:財産の中にモザイク画が含まれているのではないかと)(図57)(分りにくいので、18ページに画像付きの説明を書いておきます)。ヴェッティの家は、そのすばらしいフレスコ壁画《塗りたてのしつこくに水彩で描く絵》を含めて、自信を持って《confidently》一組の(おそらく)解放奴隷《ex-slaves》、アウルス・ヴェッティウス・コンヴィヴィア《Aulus Vettius Conviva》とアウルス・ヴェッティウス・レストイトウトウス《Aulus Vettius Restitutus》に割り当てられた。これ《ヴェッティの家が、一組の解放奴隷のものだと判断されたこと》は、正面の大広間で見つかった彼らの名前入りの2つの印鑑《seal stamps》と1つの印章つきの指輪《signet ring》に加えて、その家の外側に絵の具で描かれた一組の選挙ポスター、あるいは少なくとも古代においてそれと同等のもの《ancient equivalent》(‘レストイトウトウスは投票を頼んで回っている《canvassing for》...サビヌスが造営官《aedile》《公共の建物などを担当した官吏》になるべきだ’)に基づく——そしてその家の別の部分で発見されたもう一つの印鑑には、今回はパブリウス・クルスティウス・ファウストゥス《Pablius Crustius Faustus》という名前がついていたのだが、それが上の階に住んでいたある借家人《tenant》のものであると仮定の下で。

(22ページ)

多くの場合、証拠ははるかに薄弱で《flimsier》、おそらく(どちらかという「ことによると」とか「ひどい場合」に近いニュアンスかも)印章つきの指輪(結局、それは訪問者によって落とされたということも、所有者によって落とされたのと同じくらい容易にあり得ることなのだが)、ワインの壺に絵の具で描かれた名前、あるいはまるでグラフィティアーティスト(落書き芸術家?)がいつも自分の家の壁に書くことを決めていたかのように《as if》、同一の人物によって書かれた一組の落書きに頼っていたのである。一つの特に極端な《desperate》推論は、町の売春宿であって、多くの現代の訪問者、そして疑いなく《no doubt》古代の訪問者にとっても最も重要だった場所《high-spot》を所有していた男の名前を提案した: それはアフリカヌス《Africanus》である。これは主に、おそらく顧客によって、少女達の個室の一つの壁に走り書きされていた、悲しみを誘うような伝言に基づいた議論である。その伝言によると‘アフリカヌスは死んだ(あるいは、文字通りには‘死にかけている’)。’。「彼の学友であり、そしてアフリカヌスの死に悲しみにくれる小(若い方の)ルスティクスRusticus、これを記す(これに署名する?)」(←たぶん違いかも)。なるほど《to be sure》~ 3行下のButと呼応します)アフリカヌスは地元の住民だったのかもしれない: あるいは、近くの壁にその名を持つ誰かが地元の選挙においてサビヌス(レスティウトウスの票を勝ち取ったのと同じ候補者)に支援を約束したという事実からそのように推測するのもかもしれない。しかし、性交後の痛み《post-coital misery》という若きルスティクスの表現小ルクティクスの、性交後のみじめな気持ちの表現が(これはさっきのセリフの言い換え、な気がします)、もし事実だったとしても《if that is what it was》、それがその売春宿の所有者について、ともかく少しでも言及していると想像する理由は全くないのである。

このことや、他の同じような楽天的過ぎる、古代ポンペイの人々を探し出し彼らの元の家や酒場、売春宿に戻してやろうとする試みの、最終的な結果は明らかだ: 現代の想像からでは、ひどくたくさんポンペイの人々が結局間違った場所に(置かれる)こととなったのである。あるいは、より一般的に言うと、大きなずれ(gap)が、「私たちの(考える)」古代の町とCE 79年に破壊された町の間にはある。この本(POMPEII)の中では、私は首尾一貫して(consistently)「私たちの」ポンペイの、歴史的建造物、finding aids(何らかの記録文書の目録やリストのことを指す用

語だそうです)、そして専門用語を使っていく(shall be ~ingで近い未来に対する意志。以下多数有り)。もしヘラクレスゲート(Herculaneum Gate)に古代の名前である'Porta Salis'なんて名前がつけられたら混乱するしいらするだろう(仮定法)。フィオレッリによって発明された命数法によってすぐに地図(plan)上のある場所を指し示すことができるようになっていく(allow)ので、私は参照部分(reference sections)でこれを用いることにする。そして、それら(すぐ後のthe famous namesを指す)の中のいくつかは正しくないのかもしれないにせよ、有名な名前——ヴェッティの家、ファウンの家、など——ははるかに簡単な、ある特定の家や場所を思い出す(bring to mind)手段である。しかし、私はより詳細にそのずれを調べたり、どのようにして古代の町が「私たちの」ポンペイに変わってしまったのかを考えたり、発掘されてきた遺物(remains)から私たちが意味を見出す過程を熟慮したりするつもりである。

このような過程を強調しながら、私は最新の流行についていくことも、ある意味では、もう一つの(a more) 19世紀にあったポンペイに関する経験に立ち戻っていくことも、両方していく。もちろん、19世紀の町への訪問者たちも、21世紀の同じことをする人たち(their twenty-first-century counterparts)と同じように時をさかのぼる(steping back in time) 幻想を楽しんだ。しかし彼らは過去が彼らの前にあらわになっているその様相(the way)にもまた好奇心をそそられた: (つまり)「何を」と同じように「どのようにして」私たちはローマ時代のポンペイについて知ることなのか、ということにである。私たちはこのことを彼らのお気に入りにお気に入りの史跡のガイドブックの習慣(conventions)の中に見ることができ、とりわけミュレーの南イタリアへの旅行者のためのハンドブックなどにあり、それは1853年に初版され、その史跡への大衆観光(Grand Tourists = (上流子弟の教育のための)ヨーロッパ大陸巡遊旅行者 よりもむしろ)の始まりを迎合した。

(23ページ)

鉄道路線は1839年に開通を果たして、観光客に好まれる移動手段となったのであり、彼らは駅のそばの酒場で接客され(serviced)、その駅では廃墟での激しい活動(exertions)の後に昼食を取ることができた。ここは富(運命? fortunes)の激しく変動する(fluctuating)場所となった(1853年にはおそらく「大変文民的で(civil)親切な(obliging)地主(バーの主人のこと??)」がいて、1865年までには(ガイドブックの)読者たちは(後ろから訳すと)「地主との前もつての代金についての契約」を結ばずに突入することのないように勧められた(この部分の意味がよくわからない)。しかし、これが軽食や果物の大産業の芽生えになっていて、特にボトル入りの水は今ではその町の周辺を独占している(そこら中に広まって、なくてはならないものになっている、という意味??)。

ミュレーのハンドブックは繰り返しヴィクトリア時代の観光客たちを翻訳の問題に従事させ、さまざまな対抗する学説を分け与えた。その学説は、発掘されていた主要な建物の内のいくつかについて、それはいったい何のためのものだったのか(some ~ were for)ということに関するものであった。私たちが *macellum* (市場)と呼んでいるフォーラムの中にある建物は本当に市場だったのか? それとも寺院だったのか? それとも聖堂と軽食堂とを合わせた物であったのだろうか? (私たちは見ていくことになるだろうが、多くの機能に関する疑問は未だに解決されていないが、現代のガイドブックはその問題(problem)や論争(controversies)を——彼らは読者たちに(考える)手間を省いて(spare)あげているのだというかもしれない——読者から奪う傾向にある。)彼らは古代の建物それぞれの記述に沿って、その発掘された日付や状況にも注意を向ける(note)ほど注意深くさえもある。それ(彼らの注意深さ)はまるで、そういった初期の観光客達は2つの年表を彼らの頭の中に同時に走らせ続けていなくてはいけなかった(were supposed to)かのようなのである: その一つには、古代の町それ自身とその町の成長の年譜; もうひとつはポンペイが徐々に現代の世界に再登場する歴史である。

私たちはこういうことさえも想像したかもしれない。死体や他の目立つ発見が都合よく「発見され」、まさにちょうど訪れている高官たちが偶然通りかかることになったりした、という有名な妙技(famous stunts)は同じ関心事(preoccupations)のもう一つの側面だったのではないかと。私たちは今こういった見せ掛け

(charades)の粗雑さや、それを見る人たちのだまされやすさ(gullibility)を笑ってしまいがちである(訪問中の高官たちはそういった驚嘆すべき発見は、まさに彼らがやってきた瞬間に偶然行われるものだと想像するほど単純(naive)でありえた(could ~ have been)のだろうか?)しかし、往々にして、観光業者のいたずら(tricks)は、地元の人々の狡猾さを明らかにすると同様に、観光客の希望や切望(hopes and aspirations)をも明らかにしてくれる。つまり(Here)観光客が目撃したいのは、見つかったものそれ自身だけでなく、過去を明るみに出してゆく発掘の過程もなのである。

こういったことが、私が卒の中に戻してあげたいと願う問題のいくつかです。

驚きの町

ポンペイは驚きでいっぱいである。頑固なポンペイについて精通している学者に、この古代ローマ時代のイタリアの生活について彼らの考えを再検討させさせる。内容物が「カーシェール・ガルム(kosherとはユダヤの律法にかなった食べ物を表す形容詞)」だと記されたラベルが貼られた大きな陶器の壺を見ると、ウンブリキウス・スカウルスUmbricius Scaurus(p.21 下から1/3ぐらい garumの製造の人)のような男たちが地元のユダヤ人共同体の市場のすき間を狙ってにひろげた店に出品しようとしていたのかもしれない、などと思いをはせさせられる(壺の中の腐った混合物の、今となっては認識できない食べ物の中に、貝・エビ・カニ類は入っていないことは保証する(つまり、甲殻類は戒律で禁止されているわけです))。

(24ページ)

1938年に一軒の家から、素晴らしいインドの象牙の小像が見つかったことで、改めてローマと極東(日本語の「極東」とは指示範囲にずれがある。インド半島は 近東 Near East、中近東 Middle East に入らないという限りにおいてFar East に分類されることがある。『リーダーズ英和辞典』Far East の項目を見よ。)との結びつきについて考えることが促された。(その家はこれにちなんで「インドの小像の家」と呼ばれている。)この小像は、旅のお土産として、ポンペイの貿易商を経由してやってきたのだろうか？それともプテオリの近くに住んでいた、現代のヨルダン出身のナバタエ人の貿易社会(貿易共同体？貿易会社？)を経由だろうか？これとほとんど同じくらい思いがけなかったのは、最近発見された、バラバラになったサル¹の骸骨だ。貯蔵庫にあった人骨と同じ場所で人骨に混ざっていた。それまでの発掘者にはサルだとは気がつかれていなかった。おそらくエキゾチックなペットだったのだろう。あるいは、大道芸かサーカスで演技を披露していた、人を楽しませるよう訓練されたサルだったとするほうが、ありえそうかもしれない。

ポンペイは(このような町があらうとは)思いもかけなかったような町であり、私たちにとても親近感のもてる町であると同時に、実に奇妙な町である。ヴェスヴィウス火山より向こうは見渡せないイタリアの田舎の町であり、また同時に、スペインからシリアへ伸びるローマ帝国の一部でもあって、ローマ帝国がしばしばもたらすあらゆる文化や宗教の多様性を備えていた。

(25ページ)

ヴィア・デラボンダンザ通りにある比較的つつまじやかな家の食堂の壁に大きな文字で書かれていた有名な「ソドム」と「ゴモラ」(ソドムとゴモラは、創世記にでてくる硫黄と火によって主に滅ぼされた都市)という言葉は、(後の略奪者の悲観的意見ではないと仮定して)、ポンペイの社会生活の倫理観について、目撃証言(あるいは冗談)(が教えてくれること)以上のことを教えてくれる。ポンペイは、ウェルギリウス(古代ローマで最も重要な詩人)の作品のみならず創世記の言葉(「すると主は硫黄と火とを主の所すなわち天からソドムとゴモラの上に降らせた」)も、少なくとも一部の住人にはピンとくるような場所であることを、「ソドム」と「ゴモラ」という言葉によって気づくことができる(つまり、創世記(というある種の倫理規範)を知る住民がいた、ということ)。

(とりあえず、女・子供・奴隷を除いて)たった数千人の男の市民でできた小さな町の社会は、村とか小さな大学の学生団体と比べても決して大きくないが、それにも拘わらず、ローマの歴史の本筋に、我々が想像する以上に強力なインパクトを与えている。これから第一章で見ていくようにね。

写真 I I 《このインドの象牙の小像は、ポンペイには広い文化交流の結びつきがあったことをうかがわせてくれる。豪華な宝石以外には何も身につけていないが、彼女は豊穡と美の女神か？はたまた、ただの踊り子(ダンサー)か？》

※参考資料



The Temple of Jupiter, Juno and Minerva



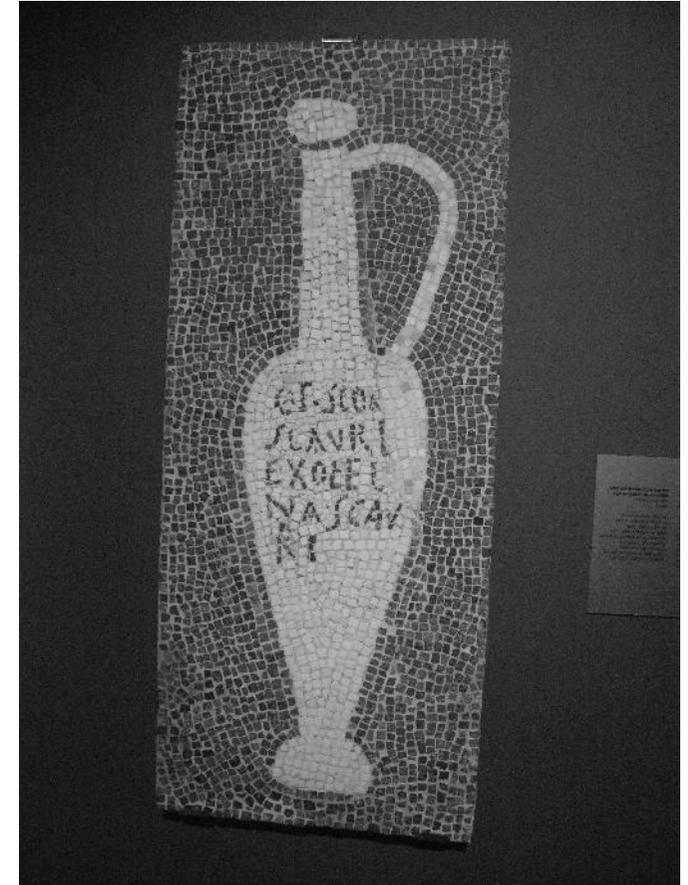
The Temple of Apollo



The Temple of Isis



ポンペイのフォルム(Forum)



L'une des quatre mosaïques qui ornent les coins de l'atrium dans la villa d'Aulus Umbricius Scaurus à Pompéi. L'amphore représentée contenait la meilleure sorte qu'il vendait, du garum de maquereau: G(ari) F(los) SCAM(bri) SCAURI

(Garum – Wikipédia)

訳:アウルス・ウンブリキウス・スカルウス邸のアトリエのすみっこを飾っていた四枚のモザイク画のひとつ。ここで描かれている陶器の器には売られている中で最上級のサバのガルムが入っている。